The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フラミンゴは何を食べる？
Author(s)	トート，クリスティナ; リヒテンシュテイン，ノエーミ
Citation	ハンガリー研究. 2023, 2, p. 95-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90933
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フラミンゴは何を食べる？

トート・クリスティナ

ゾリはワクワクしながらチャイルドシートに座って、家の前の砂利道に立っているおばあちゃんたちに車の窓から手を振っている。なぜ彼らが泣いているのか理解できない。ここには戻ってこないということを理解していないのだ。トランクの中のスポーツバッグには服、ぬいぐるみ、ダース・ベイダーの仮面、カメの塗り絵、2 箱のレゴ。５歳の彼が持っているものはたったこれだけだった。父親はまだまごまごしていて、子どもとどう話せばよいか分からずにいる。この子の母親が亡くなった 3 年以上も前から全然会っていなかったからだ。アメリカに出稼ぎに行って、グリーンカードを持っていなかったから、合衆国を離れられずにいた。やっと今になって小さいアパートの部屋を購入できる程度のお金を貯めることができた。力になってくれる妻はそばにいなかったが、自分で息子を育てる決心をした。何とかなるだろうと思っていた。

最後にゾリに会ったのは、ゾリがまだ金髪がかっていてよちよち歩きの頃だった。今は黒髪の、まなざしが印象的なりっぱな幼稚園児になっていた。こうして実際に見ると、実物は写真とまったく違っていた。びっくりするほど母親に似てきている。本人はもう覚えていない母親に。ゾリはライトセーバーだけはトランクに預けたがらず、手に握りしめて、ピカピカさせながら、徐々に小さくなっていく祖父母に手を振っている。

父親はバックミラーに映るわが子を見ながら、何て声をかければ良いかわからずにいる。とりあえず寒くないかと聞く。子どもは、寒くない、と肩をすくめる。ライトセーバーを下ろして外をぼんやり眺める。どこに行くかと聞くと、父親は家に帰ると答える。ゾリは、この村にある祖父母の家が自分のお家だと思っているので、言われたことはよく分らないが、特に理由を訊ねることもなく、横を通り過ぎるコンバインの方に気を取られている。父親はもう一度説明する。これからは 2 人で一緒に

暮らすこと、2 階建ての家に住むこと、今向かっている町の新しい幼稚園に通うこと。

その幼稚園でもチッラ先生が担任かとゾリが聞くと、そこはチッラ先生じゃなくて別の先生がいることを父親が答える。きれいな長い髪をしていて、きっとゾリも気に入ってくれるだろう。

住いの手続きは全て済ませ、子ども部屋にはベッドとタンスも買ってある。

今、車の中で、この子にはベビーベッドじゃない方がよかったかもしれないと、ふと思う。しかし家に帰ると、子どもはこのベビーベッドでも十分収まりそうと分かって、ほっとする。もう少ししたら買い替えればいいだろうし。ペンキの臭いが残っているこのアパートには、すでにソファーや洋服タンス、さらにテレビまである。ゾリはテレビを見つけると喜んで、さっそくスイッチを入れる。アップルパイが欲しいと父親にねだる。おばあちゃんが、テレビを見るときはいつもアップルパイを食べさせてくれるからなのだそうだ。

アップルパイはない。父親は息子をバルコニーに連れていき、高くて危ないから顔を出してはいけないと教える。ゾリは怖くなって、海賊のアニメの続きを見に部屋に戻りたがる。父親はため息をついて、子どもをテレビの前に座らせると、洗濯機を設置しに洗面所へ向かう。冷蔵庫と同じく中古品だが、どちらも問題なく作動している。冷蔵庫から冷凍ピザを出して、オーブンに入れる。

明日は動物園に行くと夕食を食べながらゾリに言う。ケチャップまみれの顔でゾリはうなずいてみせるが、動物園とは何かは明らかに分かっていない様子だ。父親は食器を洗って、その後ゾリを風呂に入れる。この子ってなんて細身で足もちいさいんだと驚く。子どもの体を優しくタオルに包んで、抱っこしてソファーまで連れていく。ゾリは朝 6 時から起きていて、長い一日だったから、もう半分眠った状態だ。子どもが寝ると、父親は祖父母宅に電話して、全て順調だと報告する。ゾリはもう休んでいるということも。　ヨーダの歯磨きコップと自動車柄のひざ掛けを忘れているとおばあちゃんが涙声で言うが、男性はまた新しい物を

買えば良いと慰める。

翌朝ゾリはテレビを見ながらひとりで着替えている。動物園には、ダース・ベイダーのコスチュームを着て、ライトセーバーを持って行くことにこだわっているようだ。入園料を払って、鳥小屋に向かう。

「こんなにたくさんいる！誰がえさをやるのかな？」と驚いたゾリが叫ぶ。

父親はゾリの頭を撫でて、抱きしめる。ゾリはフラミンゴやアヒルたちに背を向けて、ライトセーバーを握りしめて涙目で立っている。鶏や庭、ベッドや自動車柄のひざ掛け。これまでの人生のすべてが頭に浮かんでくる。仮面を外して、この見慣れない優しいおじさんを見上げる。ここまで連れてきてくれたこのおじさんは笑顔でこう聞く。

「肩車してあげようか。」

ダース・ベイダーはうなずいて男性の肩に乗り、ライトセーバーを渡してしっかりつかまる。息子は肩の上から次々と質問を浴びせる。男性は慎重に歩を進めながら思う。この子はなんて軽いんだ。それなのに、僕らは何と重たいものを抱えているのだろう、と。自分も動物園なんかは初めてだし、今チッラ先生は何をしているかも、フラミンゴは何を食べるのかも想像さえつかないのだった。

翻訳：リヒテンシュテイン・ノエーミ

Tóth Krisztina (2018) Mit eszik a flamingó? *Nők Lapja*. 47 (november 21): 92.